［82］ 伊藤キム＋輝く未来『劇場遊園』

2003年12月13日　朝日新聞 夕刊

舞踊

伊藤キム＋輝く未来「劇場遊園」

2003. 12. 13

主客転倒の仕掛けに爆笑も

もともと非日常的な空間である劇場が、意表を突く発想によって、さらに刺激的な状態を見せた。伊藤キムの新作「劇場遊園」は客席と舞台の関係を逆転させて舞台芸術の可能性を多面的に広げた秀作だ。（7日、世田谷パブリックシアター）

プログラムには、開場と同時に劇場内の各所でパフォーマンスが同時多発、とある。客席は立ち入り禁止なので、観客は好奇心も胸わにロビーや廊下を探索する。

定刻、数人がバタッと倒れた。客に紛れ込んでいたダンサーだ。大声で何か叫びながら廊下を駆け抜けていく女。かと思えば数人が団子状に絡まり合って床を這いずり回る者もある。彼らに巻き込まれないように、客たちも思わず身をよけ、後を追い行動させられる。第2部は客席に面して舞台上に作られた仮設の座席から見る。大音響で幕が開くと、ダンサーたちは無人の客席にいる。クリーム色のシートがモザイク模様の壁のように見え、それを背景に林立する深紅色のワンピースがじつに鮮やかだ。

やがて彼らは三々五々姿を消し、残された一組の男女が遠く離れて相対する。迷路を辿るように細い通路を駆け抜け、すれ違い、ようやく抱き合う。コミックで切ないロマンスだ。

ダンサーたちが通路の階段を這い下りて静舞になった。淡いオレンジ色の照明が彼らを月光下の亡霊のように見せ、異次元の雰囲気はますます濃厚。突然かにライトアップされた2階、3階の観客も舞台の風景だ。

意味のない言葉で綴る奇妙なコーラスの後、キムのソロ。いつもながら大胆かつ繊細、滑らかな動きである。

幕の下りた後が楽しい。カーテン・コールのパフォーマンスに続いて、拍手と照明が観客に向けられた。主客転倒の仕掛けを爆笑が包んで↗となった。

（佐々木源子・舞踊評論家）

深紅のドレスをゆらめかせて踊った伊藤キム＝瀬戸秀美氏撮影

瀬戸秀美さんの写真がすてきなので、しわしわの切り抜きをそのまま貼り付けたら、字が小さい。表示で拡大して見てください。

この舞台を観たのは二〇〇三年十二月七日。初めての孫が生まれた日だった。

早朝に生まれた赤ちゃんの顔を見て、午後もう一度見てから世田谷パブリックシアターでダンスを観た。

公演も良かったし、忘れがたい日である。

ホームページ掲載　二〇二三年十二月二十三日